+らいふニュース
令和４年度　秋号

（編集・発行）令和４年１０月
相談支援事業所 宮城野雲母倶楽部+らいふ
〒983-0012 仙台市宮城野区出花１丁目3-11
TEL/FAX：０２２－２５４－６７５７
HP：http://kilala.biz/
発行責任者 秋保 明

令和４年度 仙台市障害者自立支援協議会
第１回　地域部会

令和４年７月20日に令和４年度 第１回 地域部会が開催されました。
今年度の取り組みは「多機関協働による相談支援について」「日中サービス支援型グループホームの実施状況と評価について」ですが、今回は「日中サービス支援型グループホームの実施状況と評価について」を詳しく取り上げたいと思います。

☆日中サービス支援型グループホーム ⇒ 重度の障害を持った方を主な対象とし、24時間サービスを提供しているグループホーム

第１回地域部会では「ぐりーんるーむ小田原」「Tagomaruハウス」が出席し、施設の概要や支援内容についてご説明いただきました。

○ぐりーんるーむ小田原：令和２年12月開所。身体介助、金銭管理や通院同行などの身の回りの支援の他に、ご家族と定期的に連絡を取ったり、GH での様子が分かるようお便りを送付するなどご家族との交流支援も行っています。また、月 2 回看護師の訪問による、健康管理を行うともに、訪問看護事業所と連携して医療面においても24時間体制で相談ができるようにしています。
入居者の中には入居当初は落ち着きがなかったり、険しい表情をしていた方もいましたが、職員が親身に関わる事で徐々に表情も明るくなり、安定した生活を送る事ができるようになった方もいるとの事でした。
地域部会の委員からは、職員１人１人が入居者に対して一生懸命関わってくれる事や分からない事は専門機関や支援機関を上手に頼り、事業所の中だけで抱え込まない姿勢などが高く評価されていました。

○Tagommaru ハウス：令和元年 5 月開所。どんなに重い障害があっても住み続けられる支援体制を構築し、行動障害のある方や医療的ケアのある方の受け入れも行っています。看護師を配置し医療面のサポートも充実しています。
敷地内の「OpenVillage ノキシタ」（地域の誰もが利用できるコミュニティスペース、保育園、就 B、相談支援事業所を有する複合施設）と連携し、支援者、地域の方など様々な方と交流できる機会を設けています。
また、災害時にも対応できる建物であるため、災害時も避難所への移動がなく、入居者は住み慣れた場所で過ごす事ができるようになっています。
委員からは、人員体制も基準より多く設置しており、行動障害がある方や医療的ケアが必要な方への支援を受け入れている事、地域との交流を積極的に行っており、特に近隣の保育園で園児とも交流している事について高く評価されていました。

今回出席した事業所の他にも仙台市内でいくつか新規の日中サービス支援型グループホームが立ち上がっており、地域部会を核として事業者と支援者が協働し、充実した体制作りが期待されます。

令和４年度　第１回仙台市障害者自立支援協議会

令和４年８月30日に令和４年度 第１回 仙台市障害者自立支援協議会が開催されました。
（今回はコロナウイルスの感染拡大に伴い、オンラインでの開催）

～今年度の取り組みについて～

〇各区障害者自立支援協議会の活動や地域部会での協議を通じた地域課題の解決に向けた取り組み

①多機関協働による支援について：高齢分野、医療、司法、教育分野など様々な分野との連携に継続して取り組む。

②日中サービス支援型グループホームについて：裏面の「地域部会」をご参照ください。

③地域生活支援拠点の取り組みについて：予防的視点の理解促進のために各種会議や研修会で共有する機会を確保する。コーディネート機能の強化および役割の明確化を図る。

・基幹相談支援センターおよび発達障害者地域支援マネージャーとの協働の継続による「親亡き後」を見据え、「親」の主な相談先である地域包括支援センターへの事業周知を図る。

・短期入所施設等と緊急受け入れにおいての課題を共有し、広く受け入れを実施できる体制の確立を目指す。

〇評価・研修部会の取り組み

①ケアマネジメント従事者養成研修

基礎研修：昨年度はコロナウイルスの感染拡大により、オンデマンド形式で実施。対象者を広げられた一方で、対面形式と比べると受講者の反応や理解度が分かりにくい部分もあった。

実践研修：実施後のアンケート結果から研修テーマを選定している。昨年度は「個別支援から地域支援へ」をテーマとし、相談支援従事者を対象にオンデマンド形式により実施。

②仙台市障害者相談支援事業所運営自己評価

仙台市内の委託相談支援事業所（16 事業所）が対象。評価票に基づき、各事業所の業務の振り返りを行い、課題についてどのように取り組み、どのように変わったのかを評価する。

今年度は他者の視点を入れた評価（ピア評価）の導入に向けた取り組みや自己評価で抽出された課題の整理を進めていく。

ペンネーム そらさんの体験談からみえないつらさや不便さ、誰にでも起こり得ることであること、どのように乗り越え今の自分がいるのかを伝えていきます。

No.16「想像もされない病」

ある日、急に発熱しました。感染症ではないかと不安になり、専用電話に相談しようとした２回線とも通じず、陽性サポートの方に電話しても陽性でなければ話を聞けないとの事。偶然市から検査キットが２日後に送られてくるのをネットで知り、自分で検査しました。その後に相談電話が繋がりましたが、指定の病院までは徒歩か自転車か自家用車で行けと指示され、熱があるばかりか、心の病でどれも難しい私は途方にくれました。身元だけはどこからもしっかり聞かれました。もし私が陽性で悪化していたなら一人でどうしていたでしょう。人は自分のできる事をできない人の事は想像できないものですね。

No.17「子供の役割とは」

時々虐待される夢を見る。助けを求めても、冷たく何の情もない顔で私を見ている母の前で、私は両手を輪ゴムで縛られていた。そこで目を覚ますと、本当に両腕に痛みと赤みが長く現れていた。実際こんな形の虐待はなかったが、表に見えない心理的な虐待は多かったと思う。いつも顔面を殴るように言葉を投げかけられると、自分の思考に自信がなくなっていった。今でも私にとって人間は、私をいじめてくるものでしかない気がしてしまう。しつけと感情をぶつけることは全く違う。育てた方にしてみれば、子供の方が繊細なだけで、受け取り方の問題に過ぎないと思う事も多いだろうが、未だに私は人の顔色を見て優先しがちで、本当の自分がどういうものか分からなくて苦しい。これは何かの積み重ねが原因としか思えない。